

巻頭言

なんのための大学改革か

浜林 正夫

(八千代国際大学)

政界も「改革ブーム」のようだが、大学も「改革ブーム」である。

大学設置基準の大綱化の趣旨は、これまでのような画一的な規制はやめて、もっと大学の自主性を尊重しようということにあったはずだから、「わが大学は従来どおりにいく」という自主性をつらぬくところもあつてよさそうなものだけでも、いつせいに「改革」にむけて動きだしてしまった。まるで席を争って改札口から走りだしてしまつた乗客のように、改革へむかう大学の流れはとめようがない。

ひとつには、大学の自主性を尊重するといいつつ、文部省が改革をあとりにたてているということがある。私は前にどこかで、「設置基準の大綱化は大学に自主性を与えるのではなく、文部省の自由裁量の枠をひろげるものだ」というような意味のことを書いたことがあるが、いまや文部省は設置基準に

縛られずに、自由に伸び伸びと大学に干渉してきているような気がする。

もうひとつには、十八歳人口の急減におびえる大学の「生き残り戦略」がある。「従来どおりいこう」などとのんびりかまえていたら、大学がつぶれてしまう、あるいは、つぶれないまでも、いまの文教行政の重点政策のなかで大学のランクがさがつてしまつという恐怖心が、大学を改革へとかりたてている。

私立大学だけではなく、国公立大学までが「生き残り戦略」といいはじめ、とにかく何か目新しいことをと、まるで商店街の大売りだしのよう、宣伝に夢中である。十八歳人口が減つても進学率が上昇すれば大学入学者は減らないということに、まるで気がついていないかのようである。

だが、それでは大学はほんとうに改革を必要としていないのかといえ

じつは改革はもちろん必要なのである。しかし、そのためにはまず、大学のどこを改めなければならないのかという自己点検が必要であろう。

改革のための改革ではなく、「生き残り」のための改革でもなく、大学が時代と社会の要請にキチンと答えているのかどうか、まずきびしく問われるべきであろう。そういう視点からみると、自己点検すべき課題はきわめて多いけれども、もっとも基本となるのは、そもそも時代と社会が大学に何

を要請しているのかという点の検討である。

大学が「国家有為の人材」をつくる時代は終わったし、企業戦士をつくる時代も終わったはずである。

「国際化」と「情報化」がいま流行のキャッチフレーズだけれども、その内容はきわめてあいまいであって、国連軍に参加することを国際化だと主張する政治家もいる。私は平和と人権のための国際連帯こそ真の国際化だと考えているけれども、いづれにせよ、改

革にあたっての基本視点の深い討議なしに改革をすすめることは、じつは大学そのものの存立基盤をほりくずすことになるという危惧を禁じえない。この討議には学生の参加もまた不可欠であることを、つけ加えておきたい。

